

継続的に把握することが本研究のおもな目的である。

児童自立支援施設入所非行児における薬物乱用の動態の変化は薬物乱用検挙少年者数動向と類似している。

平成 21 年版犯罪白書<sup>8)</sup>によれば、2008 年に覚せい剤事犯で検挙した少年は 249 人、有機溶剤等の乱用で検挙した少年は 565 人で、大麻事犯で検挙した少年は 227 人であった。少年の薬物事犯のうちでは、有機溶剤乱用が依然として多いが、1990 年代初めは 2 万人以上が有機溶剤乱用により検挙されており、その数は激減している。

このような検挙数の変化が、実際の非行臨床場面における薬物乱用に反映しているかどうかを把握することは非行臨床の実践にとっても重要である。

薬物乱用では実際に検挙されず暗数となっている乱用者が多く、特に入所女子非行児では依然薬物非行は重要な位置を占めており、非行児の実際の薬物乱用状況を知ることはどうしても必要である。

本調査では、2008 年に引き続き児童自立支援施設入所非行児の薬物乱用実態を調査することにより薬物乱用のハイリスク群である非行児の薬物乱用の動態を把握する。おもな調査対象薬物は、われわれの従来調査の結果と比較できることおよび他の調査研究や司法統計資料と比較検討できることより有機溶剤、大麻、覚せい剤、ブタンとしたが、その他の薬物についても簡単に乱用経験および周囲の乱用状況を尋ねる質問項目を追加した。

## B 方法

### 1 対象

全国の 57 の児童自立支援施設入所児童、児童自立支援施設に調査用紙を配布した。回答が得られた施設は、43 施設であった(施設回収率 75.4%)。分析では性別の記載のなかった者を除いた。その結果最終的調査対象者数は 1064 人(男性 739 人、

女性 325 人)となった。

### 2 調査用紙

調査用紙は資料に示した。調査が今後も同一施設に継続的に実施できるよう、なるべく被調査施設および被調査者の負担にならないように留意した。

調査項目は、薬物乱用関連項目、薬物以外の非行関連項目、性格検査項目、一般個人属性などである。薬物乱用に関する質問項目は前回までとほぼ同じである(資料参照)。

### 3 調査手続き

調査用紙は各施設に郵送し、施設ごと集団で実施してもらった。終了後施設ごと一括して返送してもらった。回答は無記名式で、もし回答したくない場合は回答しなくても良い旨を質問紙に書き添えた。

## C 結果

### 1 対象者の属性

対象者の、性・学年構成、性・年齢構成、施設入所期間、地域別人数、非行歴、初発非行年齢、家庭裁判所係属歴を表 1 から表 7 に示した。

性別にみると男性が 739 人で全体の 69.5%を占めている。就学状況は、中学 3 年生が男性 295 人(39.9%)、女性が 151 人(46.5%)と最も多い。中学生が多いが、高校生および専門学校生が男性 6.5%、女性 5.2%であった。中学卒業後で無職である者も男性 5.0%、女性 6.2%を占めている。そのほか小学生が男女それぞれ 5.6、1.8%いた。就労者は男女それぞれ 0.4%、0.9%であった(表 1)。年齢で見ると中学 2 年および 3 年に相当する 14 歳および 15 歳が男性でそれぞれ 35.7%、26.9%、女性で 36.3%、32.0%と多くを占めていた。一方、18 歳以上の者は男女それぞれ 0.9%、0.6%であった(表 2)。

施設入所期間は、入所初期の 3 ヶ月以下の者が

男性 137 人(18.5%), 女性 62 人(19.1%)であった。一方, 2 年以上入所している者は男性 75 人(10.1%), 女性 22 人(6.8%)いた(表 3)。

在住地は, 施設の所在地により北海道・東北, 関東, 中部, 関西, 中国・四国, 九州・沖縄に分けた。国立 2 施設については児童本人の居住地を確認していないため在住地不詳とした。最も人数の多かった地域は関東(男性 143 人, 女性 52 人)であり, また調査対象数が最も少なかったのは九州(男性 64 人, 女性 38 人)であった(表 4)。

非行歴に関しては多いものから順に, 男性では怠学 508 人(68.7%), 家出・外泊 483 人(65.4%), 窃盗 475 人(64.3%), 傷害 460 人(62.2%), 女性では怠学 272 人(83.7%), 家出・外泊 264 人(81.2%), 不良交友 217 人(66.8%), 窃盗 216 人(66.5%), 自転車盗 197 人(60.6%)などとなっている(表 5)。

初発非行年齢は, 男女とも小学校 3 年から中学校 1 年が 10%台が多い。女性では全体に男性より初発非行がやや高い傾向にあり, 女性の最も多い初発非行年齢は中学 1 年の 56 人(17.2%)であった(表 6)。

家庭裁判所への係属歴は, 性差はなく, 男性 192 人(26.0%), 女性 76 人(23.4%)である(表 7)。

## 2 薬物乱用の頻度

調査対象薬物は前回 2008 年調査と同じく有機溶剤, ブタン, 大麻, 覚せい剤, コカイン, 睡眠薬, 安定剤, 咳止め液, MDMA, リタリンである。非行児の薬物乱用は, 女性に多いため, 男女別に検討した。また, 薬物への意識は, 薬物乱用者と非乱用者と異なると予想されるので両者を分けて分析した。

### 1) 周囲の薬物乱用頻度(表 8)

少年達の交友関係など周囲に各種薬物乱用者がいるかどうか尋ねた。その結果, すべての薬物で女性は男性よりも周囲の薬物乱用頻度が高かった。

男性では, 有機溶剤 145 人(19.6%), ブタン 138 人(18.7%), 大麻 82 人(11.1%), 抗不安薬(安定剤)75 人(10.1%), 咳止め液 64 人(8.7%), 覚せい剤 59 人(8.0%), コカイン 28 人(3.8%), リタリン 16 人(2.2%), MDMA15 人(2.0%), 睡眠薬 7 人(0.9%)の順であった。

女性では有機溶剤 171 人(52.6%), 抗不安薬(安定剤)134 人(41.2%), ブタン 118 人(36.3%), 大麻 112 人(34.5%), 覚せい剤 111 人(34.2%), 咳止め液 103 人(31.7%), コカイン 49 人(15.1%), MDMA26 人(8.0%), リタリン 27 人(8.3%), 睡眠薬 15 人(4.6%)の順であった。

### 2) 本人の薬物乱用頻度(表 9)

本人の薬物乱用もすべての薬物において女性は男性より頻度が高かった。

男性では, 乱用頻度が高い順に, ブタン 67 人(9.1%), 有機溶剤 53 人(7.2%), 安定剤 30 人(4.1%), 咳止め液 18 人(2.4%), 大麻 14 人(1.9%), コカイン 8 人(1.1%), 睡眠薬 5 人(0.7%), MDMA・覚せい剤 3 人(0.4%), リタリン 2 人(0.3%)であった。

女性では, 乱用頻度が高い順に, 有機溶剤 93 人(28.6%), 安定剤・ブタン 70 人(21.5%), 咳止め液 42 人(12.9%), 大麻 41 人(12.6%), 覚せい剤 27 人(8.3%), コカイン 21 人(6.5%), MDMA13 人(4.0%), 睡眠薬・リタリン 8 人(2.5%)であった。

各薬物とも無回答者がいたため乱用頻度の少ない薬物では結果の信頼性に問題がある。

### 3) 飲酒歴(表 10, 表 11)

今年度より飲酒歴についても確認することとした。1 年に数回以上飲酒した者は, 男性では 443 人(59.9%)女性では 255 人(78.5%)であった。男性では 1 年で数回以上, 月に 2-3 回, 週に 2-3 回が多いが, 女性ではほぼ毎日あるいは週に 2-3 回と回答した者で 50%以上をしめ, 女性のほうが飲酒していた。飲酒開始年齢は, 男女とも中学校 1

年生が20%以上で最も多かった。

#### 4) 喫煙歴(表11, 表12)

喫煙歴についても今年度より調査項目とした。喫煙歴は男性474人(64.1%)女性252人(77.5%)であり、女性のほうがやや頻度が高かった。喫煙は、飲酒と異なり経験者では使用頻度はほぼ毎日とする者が男女とももっとも多かった。男性の311人(42.1%)女性の193人(59.4%)が毎日喫煙をしていた。

#### 5) 有機溶剤, 大麻, 覚せい剤の乱用頻度の年代変化(表14, 表15)

有機溶剤, 大麻, 覚せい剤の乱用頻度について、1994年から今回2010年調査までの隔年調査結果を表にまとめた。

有機溶剤乱用は、男性において一貫して減少しており1994年41.2%から2008年には10.7%となり、今回は7.2%と10%以下になった。女性有機溶剤乱用率は男性よりも減少率がゆるやかであったがやはり漸減し前回2008年30.5%から今回28.6%となり30%以下となった。

大麻は男性では1994年から2008年までほぼ4%から6%の範囲であったが、今回1.9%となり半減した。女性では1998年から2008年にかけて14%から15%台であったが今回は12.6%とやや減少したが大きな変化ではない。

覚せい剤は男性では1994年1.2%から2000年5.0%まで増加したのち、2002年2.5%、2004年1.6%となり、2006年は以降1%以下であり今回も0.4%と少なかった。女性では1994年6.6%から1998年16.9%まで増加したが、2000年15.2%から2006年10.9%へと低下傾向であり、2008年以降は10%以下が続いた。

#### 6) 地域ごとの有機溶剤, 大麻, 覚せい剤の乱用頻度(表16, 表17)

有機溶剤, 大麻, 覚せい剤, ブタンの各種薬物

乱用頻度を地域ごとにみてもみた。

男性では、有機溶剤乱用は全般に西日本方面でやや高い傾向にあった。大麻乱用は関東が3.6%と高かった。ブタン乱用は関西方面でやや高い傾向であった。

女性の場合、有機溶剤やブタンでは地域差が目立たないが大麻や覚せい剤では地域差があるようである。九州は全般に乱用頻度が高い。

地域別の検討では、対象数が少なくなるので調査年度による変動が大きくなりやすく信頼性は低いと考えられる。

### 3 有機溶剤, 大麻, 覚せい剤乱用の意識・実態

#### 1) 有機溶剤

##### ① 周囲の有機溶剤乱用による精神症状発現者(表18)

身近に有機溶剤乱用の結果、病気や異常になった人がいたかどうか訪ねた。

その結果、男性の45人(6.1%)、女性の75人(23.1%)が身近に有機溶剤乱用の結果と思われる異常を訴える人がいたと答えていた。女性に周囲の症状発現者が多かった。

##### ② 有機溶剤乱用の誘い(表19)

有機溶剤吸引を誘われたことがある者は、男性86人(11.6%)、女性112人(64.0%)であった。

##### ③ 有機溶剤入手性(表20)

有機溶剤の入手が困難であるかどうかについて尋ねた。

簡単に手に入るとしたものは、男性では121人(16.4%)、女性では112人(34.5%)であり、女性の方が簡単に手に入るとした者が多かった。

##### ④ 有機溶剤乱用開始年齢(表21)

有機溶剤乱用開始年齢は、男女とも中学1年生あるいは中学2年生である13歳が最も多かった(男性17人(32.1%)、女性21人(22.6%))。続い

て14歳、12歳が開始年齢として多かった。

#### ⑤ 有機溶剤吸引頻度(表22)

有機溶剤を最も乱用していた時期の吸引頻度を尋ねた。「今まで1,2回」が男女それぞれ28人(52.8%),43人(46.2%)と多かった。「ほとんど毎日」と回答した者は男女それぞれ3人(5.7%),5人(5.4%)であった。乱用頻度に性差はなかった。

#### ⑥ 有機溶剤乱用への法律知識(表23)

乱用者に対して、有機溶剤乱用が法律で禁止されていることを知っているかどうか尋ねた。その結果、知っていた者は男性47人(88.7%),女性では43人(83.9%)でありほとんどの乱用者は禁止されていることを知っていた。

#### ⑦ 有機溶剤乱用への態度(表24,25)

この項目は、男女ごとに有機溶剤乱用経験別に比較した。有機溶剤乱用に対して、「法律で禁じられているから、すべきではないと思う」、「法律で禁じられてはいるが、少々ならかまわないと思う」、「法律で禁じられてはいるが、それを守る必要は全然ないと思う」の3件法で回答してもらった。

「法律で禁じられているからすべきではないと思う」と法的に答えた者は、有機溶剤非乱用者では男性493人(73.8%),女性121人(43.2%)だったのに対し、有機溶剤乱用者では男性12人(22.6%),女性7人(5.5%)と少なかった。

一方、「少々ならかまわないと思う」、「法律を守る必要は全然ないと思う」という許容的回答をした者は、乱用者では男性38人(71.7%)および女性82人(64.1%)と多く、一方、非乱用者では男性82人(12.3%)および女性76人(27.1%)と少なかった。

以上、男女とも乱用者は有機溶剤乱用に許容的であった。

#### ⑧ 有機溶剤乱用禁止への態度(表26,27)

法律で有機溶剤乱用を禁止していること自体への意見を尋ねた。「禁止することを当然」としているのは非乱用者では男女それぞれ416人(62.3%),92人(43.2%)であったのに対し、有機溶剤乱用者では「禁止することを当然」とした者は男女それぞれ15人(28.3%),12人(12.9%)にすぎなかった。「有機溶剤くらい禁止しなくても良い」「そもそも法律で決める必要はなく、個人の好きにさせればよい」を合わせた有機溶剤乱用に肯定的意見が、有機溶剤乱用者では、男女それぞれ23人(43.4%),59人(43.0%)あり、非乱用者よりも多かった。

#### ⑨ 有機溶剤の有害性知識(表28,29)

有機溶剤乱用の影響として、急性中毒死、多発神経炎、精神病状態、無動機症候群、フラッシュバックについて尋ねた。

これらの有害性については、精神病状態およびフラッシュバックが有機溶剤乱用の有無にかかわらず男女とも良く知られていた。精神病状態が生じることを知っていた者は、男性では乱用者36人(67.9%)非乱用者387人(57.9%),女性では乱用者73人(78.5%)非乱用者160人(75.1%)であった。また、乱用者・非乱用者とも女性の方が男性よりも有害性知識がある傾向にあった。

#### ⑩ 有機溶剤で体験した症状(乱用者)(表30)

有機溶剤による症状としては精神病状態が男性乱用者10人(18.9%),女性乱用者23人(24.7%)に訴えられていた。フラッシュバックも男性乱用者9人(17.0%),女性乱用者25人(26.9%)に見られた。無動機症候群や多発神経炎の症状も尋ねているが、これらは本人の訴えであるので正確な診断ではない。

#### ⑪ 有機溶剤の有害性知識と乱用抑止(表31)

有機溶剤乱用の有害性の知識が有機溶剤乱用を

抑止するかどうかを有機溶剤乱用者に尋ねた。

「害を知っていたら吸引しなかったと思う」が男性乱用者では 17 人(32.1%)、女性乱用者では 20 人(21.5%)であった。一方、「やはりしていたと思う」は男女乱用者それぞれ 20 人(37.7%)、56 人(60.2%)であった。

#### ⑫ 施設退所後、乱用しないと思うか(有機溶剤乱用者のみ)(表 32)

今回施設を退所した後有機溶剤を再び乱用すると思うかどうかを乱用者に尋ねた。その結果、「絶対やらないと思う」は男女それぞれ 39 人(73.6%)、48 人(51.6%)であった。一方、「多分やると思う」「絶対やると思う」と答えた者は男性ではそれぞれ 3 人(5.7%)、1 人(1.9%)、女性ではそれぞれ 17 人(18.3%)、0 人(0.0%)と少なかった。

#### ⑬ 退所後、乱用すると思う理由(退所後「多分やる」「絶対やる」と答えた者のみ)(表 33)

上記退所後乱用すると思うと答えた者にその理由を尋ねた(重複回答あり)。男性では「誘われたらやると思うから」とした者が 3 人(75.0%)、「なんとなくそう思うから」が 4 人(100%)いた。女性では「誘われたらやると思うから」とした者が 8 人(47.1%)、「今もやりたいと思っているから」が 7 人(41.2%)、「いやなことがあったらやると思うから」が 14 人(82.4%)、「なんとなくそう思うから」が 9 人(52.9%)いた。

## 2) ブタン乱用

### ① 周囲のブタン乱用による精神症状発現者(表 34)

身近にブタン乱用の結果、病気や異常になった人がいたかどうか訪ねた。

その結果、男性の 56 人(7.6%)、女性の 56 人

(17.2%)が身近にブタン乱用の結果と思われる異常を訴える人がいたと答えていた。女性に周囲のブタンによる症状発現者が多かった。

### ② ブタン乱用の誘い(表 35)

ブタン乱用(ガスパン遊び)を誘われたことがあるとした者は、男性 81 人(11.0%)、女性 80 人(24.6%)であった。

### ③ ブタン入手困難さ(表 36)

ブタンの入手が困難であるかどうかについて尋ねた。

簡単に手に入ると回答したのは、男性では 244 人(33.0%)、女性では 157 人(48.3%)であり、4 割前後の者がブタン入手は容易としていた。

### ④ ブタン乱用(ガスパン遊び)を知っていたか(表 37)

乱用以前よりブタン乱用(ガスパン遊び)ということばを知っていたかどうかを尋ねた。非乱用者には施設入所以前に知っていたかどうかを尋ねた。

もともと知らなかった者は、男性では 376 人(50.9%)、女性では 100 人(30.8%)であり、関心がなかったとした者が男性 216 人(29.2%)、女性では 140 人(43.1%)であった。一方、試してみたかったと関心を示した者が男性 46 人(6.2%)、女性では 45 人(13.8%)いた。

### ⑤ ブタン乱用開始年齢(表 38)

ブタン乱用開始年齢は、男性では 13 歳が 21 人(31.3%)と多かった。女性では 12 歳から 14 歳までがいずれも 22%から 24%ほどで多かった。

### ⑥ ブタン乱用頻度(表 39)

ブタンを最も乱用していた時期の吸引頻度を尋ねた。「ほとんど毎日」していた経験があるのは、男性 10 人(14.9%)、女性 11 人(15.7%)であった。一方、「いままで 1,2 回」のみと回答した者は男

性23人(34.3%),女性23人(32.9%)であった。ブタン乱用に関して乱用頻度の性差はないようであった。

#### ⑦ ブタン乱用への態度(表 40, 41)

男女ごとにブタン乱用経験別に比較した。ブタン乱用についてどう思うかを、「すべきではない」、「少々ならかまわないと思う」、「かまわないと思う」の3件法で回答してもらった。

「乱用すべきではない」と答えた者は、ブタン非乱用者では男性 286 人(43.9%),女性 102 人(43.2%)だったのに対し、乱用者では男性 15 人(22.4%)および女性 6 人(8.6%)と少なかった。非乱用者ではブタン吸引そのものを知らなかった者が男女それぞれ 246 人(37.8%), 63 人(26.7%)と多かった。

#### ⑧ ブタンの有害性知識(表 42, 43)

ブタン吸引の影響として、精神病状態、急性中毒死について尋ねた。

非乱用者では、精神病状態および急性中毒死いずれも知らなかった者が男性 417 人(64.1%)女性 121 人(54.2%)と多くを占めていた。男性乱用者では精神病状態、急性中毒死を知っていたものはそれぞれ 20 人(29.9%), 24 人(35.8%)であった。女性では、精神病症状について知っていた者は乱用者 28 人(40.0%)非乱用者 75 人(31.8%),急性中毒死について知っていた者は乱用者 26 人(37.1%)非乱用者 56 人(23.7%)であった。男女とも有害性の知識は乱用者と非乱用者の間に大きな差はないようであった。

#### ⑨ ブタンで体験した症状(乱用者)(表 44)

乱用者において体験した症状を尋ねた。その結果ブタン乱用によって精神病状態を体験した者は男女それぞれ 15 人(22.4%), 23 人(32.9%)であった。フラッシュバック体験率は男女それぞれ 9 人(13.4%), 22 人(31.4%)であった。

#### ⑩ ブタンの有害性知識と抑止(表 45)

ブタンの有害性知識がブタン吸引を抑止するかどうか検討するためブタンの有害性を知っていたら乱用しなかったかどうかを乱用者に尋ねた。男性では「害を知っていたら吸引しなかったと思う」と「やはりしていたと思う」がいずれも 30~40%前後でほぼ同じであった。一方、女性では「やはりしていたと思う」47 人(67.1%)が「害を知っていたら吸引しなかったと思う」16 人(22.9%)よりも多かった。

#### ⑪ 施設退所後、乱用したいと思うか(ブタン乱用者のみ)(表 46)

今回施設を退所した後ブタンを再び乱用すると思うかどうかを乱用者に尋ねた。その結果、「多分やると思う」あるいは「絶対やると思う」と答えた者は男性では 2 人(3.0%),女性では 13 人(18.5%)であり、「絶対やらないと思う」は男女それぞれ 51 人(76.1%), 33 人(47.1%)であった。退所後のブタン乱用への気持ちに性差はないようであった。

#### ⑫ 退所後、乱用すると思う理由(「多分やる」「絶対やる」と答えた者のみ)(表 47)

退所後乱用すると思うと答えた者にその理由を尋ねた。対象人数が男性 2 人女性 13 人と少なかった。退所後乱用すると思う理由として「今もやりたいと思う」「いやなことがあったらやると思う」などがあげられた。

### 3) 大麻

#### ① 周囲の大麻剤乱用による精神症状発現者(表 48)

身近に大麻乱用の結果、病気や異常になった人がいたかどうか尋ねた。

その結果、男性の 55 人(7.4%)、女性の 68 人(20.9%)が身近に大麻乱用の結果と思われる異常を訴えていた人がいたと答えていた。大麻による周囲の精神症状発現者は女性に多かった。

## ② 大麻乱用の誘い(表 35)

大麻の使用を誘われたことがあるとした者は、男性 45 人(6.1%)、女性 81 人(24.9%)であった。

## ③ 大麻入手性困難さ(表 50)

大麻の入手が困難であるかどうかについて尋ねた。

簡単に手に入るとしたものは、男性では 49 人(6.6%)、女性では 61 人(18.8%)であり、女性の方が簡単に手に入るとする者が多かった。

## ④ 大麻の知識(表 51)

「大麻を吸う前(使ったことがない人は施設入所前)、大麻についてあなたはどのように思っていたか」を尋ねた。

関心がなかったとした者が男性 387 人(52.4%)女性 171 人(52.6%)と多かった。一方「見てみたかった」が男性 48 人(6.5%)女性 39 人(12.0%)、「試してみたかった」が男性 17 人(2.3%)女性 49 人(15.1%)であった。

## ⑤ 大麻の乱用開始年齢(表 52)

大麻乱用者に乱用開始年齢を尋ねた。男性では 6 人(42.9%)女性では 30 人(73.1%)が 13 歳から 14 歳が開始年齢と回答しており、この年代に開始年齢として多かった。男性では 10 歳以下と答えた者がいた。

## ⑥ 最もしていた時の大麻乱用頻度(表 53)

大麻乱用経験者に最も吸引していた時期の吸引頻度を尋ねた。男性では「今まで 1, 2 回」が 8 人(57.1%)と多かったが、女性では「数回以上」が 18 人(48.9%)で多かった。女性では「ほとんど

毎日」と答えた者が 6 人(14.6%)みられた。

## ⑦ 大麻乱用への法律知識(表 54)

大麻乱用者に対して、大麻乱用が法律で禁止されていることを知っているかどうか尋ねた。その結果、知っていた者は男性 9 人(64.3%)、女性では 38 人(92.7%)でありほとんどの乱用者は禁止されていることを知っていた。

## ⑧ 大麻乱用への態度(表 55, 56)

大麻を吸うことをどう思っていたかを大麻乱用の有無で比較した。大麻非乱用者は、男性 542 人(77.5%)、女性 153 人(57.5%)が、「法律で禁じられているからすべきではないと思う」と答えていた。一方、大麻乱用者では、「すべきではない」とした者が男女それぞれ 3 人(21.4%)、2 人(4.9%)に過ぎなかった。大麻乱用者では「少々ならかまわないと思う」「それを守る必要は全然ない」をあわせた大麻乱用に肯定的意見が男性で 8 人(57.1%)、女性で 38 人(92.7%)を占めていた。男女とも乱用者のほうが許容的態度であった。

## ⑨ 大麻禁止への態度(表 57, 58)

法律で大麻を禁止していること自体への意見を尋ねた。有機溶剤乱用の場合と同様、非乱用者は、「禁止することを当然」としとするものが多い(男性 71.2%、女性 49.2%)のに対し、大麻乱用者では「禁止することを当然」とした者は少なかった(男性 21.4%、女性 7.3%)。大麻乱用者では「大麻くらい禁止しなくても良い」「そもそも法律で決める必要はなく、個人の好きにさせればよい」など大麻吸引に肯定的意見が男女それぞれ 42.8%、63.4%と多かった。

## ⑩ 大麻の有害性知識(表 59, 60)

大麻吸引の影響として、精神病状態、無動機症候群について尋ねた。全体に乱用者は非乱用者よりも知識があった。乱用者は男女とも 60%以上が

精神病状態が起こることを知っていた。

#### ⑪ 大麻で体験した症状(乱用者)(表 61)

乱用者に大麻による精神症状を尋ねた。精神病状態は男性 2 人(14.3%),女性 12 人(29.3%)にみられた。無動機症候群は男性 2 人(14.3%),女性 15 人(36.6%)にみられた。精神病状態は女性に多かった。

#### ⑫ 大麻の有害性知識と抑止(表 62)

大麻吸引の有害性の知識が大麻吸引を抑止するかどうかを検討するため、大麻による害を知っていたら吸引しなかったと思うかどうかを大麻乱用者に尋ねた。

「害を知っていたら吸引しなかったと思う」と答えた大麻乱用者は、男女それぞれ 4 人(28.6%),5 人(12.2%)にすぎず、「やはりしていたと思う」と答えた者が多かった。

#### ⑬ 施設退所後の大麻使用(大麻乱用者のみ)(表 63)

今回施設を退所した後大麻を再び乱用すると思うかどうかを乱用者に尋ねた。その結果、男女ともほとんどの者が「多分やらないと思う」(男性 4 人(28.6%),女性 15 人(36.6%))あるいは「絶対やらないと思う」(男性 6 人(42.9%),女性 16 人(39.0%))と答えていた。

退所後も乱用する理由としては、「今もやりたいと思っているから」「いやなことをあつたらやと思う」などがあげられた(表 64)。

### 4) 覚せい剤

#### ① 周囲の覚せい剤乱用による精神症状発現者(表 65)

身近に覚せい剤乱用の結果、病気や異常になった人がいたかどうか訪ねた。

その結果、男性の 41 人(5.5%),女性の 86 人(26.5%)が身近に覚せい剤乱用の結果と思われる

異常を訴えていた人がいたとしており、女性の周囲で覚せい剤乱用による精神症状発現者が多かった。

#### ② 覚せい剤入手性(表 66)

覚せい剤の入手が困難であるかどうかについて尋ねた。

簡単に手に入るとした者は、男性では 31 人(4.2%),女性では 52 人(16.0%),また少々苦労するが手に入ると答えた者が男性 76 人(9.6%),女性 69 人(21.2%)であり、女性の方が簡単に手に入るとする者が多かった。

#### ③ 覚せい剤への関心(表 67)

「覚せい剤を使う前(使ったことがない人は施設入所前)、覚せい剤についてどう思っていたか」を尋ねた。「見てみたかった」および「試してみたかった」という覚せい剤への関心を示した者が男性の 50 人(6.7%),女性の 79 人(24.3%)を占めた。女性は男性よりも覚せい剤乱用以前から覚せい剤への関心が高かった。

#### ④ 覚せい剤乱用への誘い(表 68)

「入所前、覚せい剤の使用を誘われたことがあるかどうか」を尋ねた。男性では 26 人(3.5%),女性では 51 人(15.7%)が覚せい剤乱用に誘われていた。この質問項目では無回答が男女それぞれ 261 人(35.3%),72 人(22.2%)と多いためその点を考慮する必要がある。

#### ⑤ 覚せい剤の乱用開始年齢(表 69)

覚せい剤乱用者にはじめて覚せい剤を乱用した年齢を尋ねた。男性では乱用者が 3 人と少ないので開始年齢についてははっきりしない。女性では 15 歳が 9 人(28.1%)で最も多く、ついで 14 歳の 5 人(15.6%)であった。

#### ⑥ 覚せい剤の乱用頻度(表 70)

覚せい剤乱用者が最も乱用していた時期にどの



程度乱用していたかを尋ねた。男女とも「数回以上」が2人(66.7%)および12人(41.4%)と多かった。一方、女性では「ほとんど毎日」とした者も9人(31.0%)いた。

#### ⑦ 覚せい剤の乱用方法(表71)

乱用方法を「吸引」「注射」「吸引と注射」に分けて尋ねた。吸引のみを乱用方法としてあげた者が女性では18人(62.1%)と最も多かった。古典的使用法である注射のみをあげた者は男女それぞれ1人(33.3%)、4人(13.8%)であった。「吸引と注射」をあげた者は、男女それぞれ1人(33.3%)、5人(17.2%)であった。

#### ⑧ 覚せい剤への態度(表72,73)

男女別乱用経験別に覚せい剤への態度を比較した。男性では乱用者が少ないため乱用有無別の比較はあまり実がない。男性では約80%が「乱用すべきではない」としている。女性では乱用者29人のうち「少々ならかまわないと思う」11人(37.9%)「それを守る必要は全然ない」8人(27.6%)など覚せい剤乱用に肯定的意見が多く「乱用すべきではない」は8人(27.6%)と少なかった。これに対し女性の非乱用者では「乱用すべきではない」が240人(64.3%)で2/3ほどを占めていた。

#### ⑨ 覚せい剤禁止への態度(表74,75)

法律で覚せい剤を禁止していること自体への意見を尋ねた。男性では「禁止するのは当然である」とする者がおよそ75%であった。女性では乱用者では「禁止するのは当然である」は9人(31.0%)、「そもそも法律で決める必要はなく、個人の好きにさせればよい」という覚せい剤使用に肯定的意見が9人(31.0%)にみられた。一方、女性の非乱用者では「禁止するのは当然である」が209人(56.0%)であった。

#### ⑩ 覚せい剤の有害性知識(表76,77)

覚せい剤吸引の影響として、精神病状態およびフラッシュバックについて尋ねた。男性では精神病状態およびフラッシュバックについて知っているとした者が40%ほどであった。一方、女性では精神病状態やフラッシュバックについては知っている者は乱用者でいずれも21人(72.4%)があった。非乱用者でも60%ほどが有害性の知識があった。

#### ⑪ 覚せい剤の有害性体験率(表78)

覚せい剤乱用者に、精神病状態、フラッシュバックの体験について尋ねた。男性では、乱用者が少ないこともあり、精神病状態、フラッシュバックの体験した者はいなかった。一方、女性では、精神病状態、フラッシュバックの体験した者はそれぞれ15人(51.7%)、11人(37.9%)いた。

#### ⑫ 覚せい剤の有害性知識と抑止(表79)

覚せい剤有害性知識が覚せい剤吸引を抑止するかどうかを覚せい剤乱用者に尋ねた。「害を知っていたら吸引しなかったと思う」が女性4人(13.8%)であった。「やはりしていたと思う」とする者が、女性で19人(65.5%)であり、有害性を知っていても乱用したとするものの方が多かった。

#### ⑬ 施設退所後の乱用可能性(覚せい剤乱用者のみ)(表80)

今回施設を退所した後覚せい剤を再び乱用するかどうかを乱用者に尋ねた。その結果、男性では回答全員「絶対やらないと思う」と答えていた。女性では2人(6.9%)が「多分やると思う」と答えていた。理由については、「今もやりたいと思っているから」と「いやなことがあったらやると思うから」があげられていた(表81)。

## D 考察

### 1 本年度調査の薬物乱用実態

#### 1) 乱用薬物の種類

今年度の調査で、非行児の乱用薬物として多かったのは男性ではブタン 67 人(9.1%)および有機溶剤 53 人(7.2%)、抗不安薬(安定剤)乱用 30 人(4.1%)、女性では有機溶剤 93 人(28.6%)、ブタン 70 人(21.5%)、抗不安薬(安定剤)乱用 70 人(21.5%)であった。

これまでの入所非行児調査では男女とも有機溶剤が最も多い乱用薬物であったが、2006 年調査以降は男性では有機溶剤乱用よりもブタン乱用の方が多くなっている。また医療薬である抗不安薬の乱用が、男女とも比較的多く認められるようになってきている。

薬物乱用で検挙された少年数は近年減少している(平成 21 年版犯罪白書)。特に有機溶剤乱用は 1990 年頃には 2 万人以上が検挙されていたが、その後急激に減少していき 1994 年に 1 万人以下となり 2006 年には 1000 人以下と大きく減少している。2008 年には検挙者は 565 人であった。

一方ブタン乱用者数は十分な資料がないためはつきりしないが、われわれの調査からは有機溶剤乱用よりも多いことが疑われる。現在ブタン乱用は青少年の間で相対的に重要な乱用薬物となってきたと思われる。

また医薬品である抗不安薬の乱用が男性 30 人(4.1%)女性 70 人(21.5%)と比較的多く認められている。青少年の乱用薬物としてブタンと並びあまり重要視されていないが頻度の高い乱用薬物として注意する必要がある。有機溶剤乱用が急減してきたためブタンや抗不安薬が相対的に頻度が高くなり、実態については今後とも把握していく必要がある。これまで抗不安薬については「いわゆる精神安定剤」として質問してきたが具体的薬物名を聞くなど質問方法の変更も考えられる。

また医薬品として以前より使用されていた咳止め液(ブロン液など)も乱用薬物としてまだ時々みられる。

男性においてその他の薬物乱用頻度は 1%台以下である。この値は未回答者の頻度と変わらずこ

れらの薬物乱用頻度は信頼性が低いと考えられる。

全体的に薬物乱用が減少してきているため、特に男性では児童自立支援における薬物問題の重要性は相対的に低下していると考えられる。そのため薬物に対する啓蒙教育があまり行われなくなるのではないかと心配される。

## 2) 薬物乱用の性差

入所非行児の薬物乱用の性差については、従来と同様にすべての薬物において男性より女性の方が乱用率が高くまた乱用者実数も多かった。一方、平成 19 年版青少年白書<sup>9)</sup>によれば、有機溶剤乱用、大麻乱用、覚せい剤乱用により検挙された犯罪少年のうち女性の割合はそれぞれ 41.7%、16.7%、64.9%である。つまり大麻のみ著しく男性に多く、有機溶剤はやや男性が多く、覚せい剤は女性が多い。われわれの調査対象である入所非行児においては、これは検挙された犯罪少年の場合とはやや異なるといえる。

この理由として、一つには女子非行では性非行や薬物非行が重要な入所理由となりやすいことが考えられる。児童保護の観点から、薬物問題は男性より女性で重要となりやすい。児童自立支援施設への入所は児童相談所や家庭裁判所の判断によるので、女性の場合の方が薬物乱用をしたことよって施設入所になる可能性が高いと思われる。

## 3) 薬物乱用の地域差

薬物乱用の頻度を地域ごとの検討した結果、薬物の種類により地域差が認められた。しかし、地域ごとの対象人数はそれほど多くないので乱用率などの結果の変動は大きい。そのため地域差については断定的なことは言いにくい。

過去の結果を見てみると、2000 年度調査では、有機溶剤乱用および覚せい剤乱用頻度は関西地域が高く、ブタン乱用は地域差があまりなかった。2002 年調査では北海道・東北地方で有機溶剤乱用、ブタン乱用、大麻乱用などが多かった。2004 年度

は東北・北海道では全般に各種の薬物乱用が多く九州は有機溶剤乱用がおもな乱用薬物であり他の乱用薬物は比較的少ないという結果であった。2006年度は男性よりも女性で地域差があるようで関東および関西で多少薬物乱用率が高いという結果であった。

このように対象数が少ないため地域差を検討するのは困難であるが、薬物乱用は環境の影響が大きいと考えられるので今後とも地域差については検討をしていく。

## 2 薬物乱用の年代変化

乱用頻度の年代変化は回答数や回答施設の変動の影響を受ける。前回2008年調査では回答者数1300人台であったが今回は1064人でやや少なかった。となった。このような回答率の変動を考慮し結果の解釈には注意が必要である。また薬物乱用には地域差があるので回答する施設が調査ごとに異なるとその影響も出てくると思われる。さらに対象者のうち1年以上入所している者が30%以上いる。これらの対象者では1年以上前の薬物経験を訪ねていることになるので警察統計の年度と直接比較し評価することは難しい。

以上を考慮したうえで有機溶剤乱用、大麻乱用、覚せい剤乱用の年次変化についておよそ下記のとおりである。

### 1) 有機溶剤

男性では1994年度調査より有機溶剤乱用は一貫して減少しており、1994年度から今回2010年まで2年おきに41.2%、37.3%、30.3%、26.4%、21.6%、14.3%、9.8%、10.7%、7.2%となっている。

一方、女性も減少傾向にあるが男性ほど顕著でない。女性では、1994年から1998年までの59.6%、50.6%、48.5%と減少したが、2000年は52.3%とやや上昇し、その後2002年46.5%、2004年44.2%、2006年31.1%、2008年30.5%、2010年28.6%と減少してきている。

平成21年版犯罪白書によれば有機溶剤乱用により検挙された少年数は1991年ごろは2万人前後であったがその後漸減し、2008年には565人までに減少した。この傾向は児童自立支援施設入所非行児の有機溶剤乱用者数の動向は検挙少年数との変化と相関していると思われる。児童自立支援施設入所児童の有機溶剤乱用率が今後とも減少していくか継続的調査が必要である。

### 2) 大麻

大麻乱用は、男性では1994年および1996年は5.5%、6.7%であったが、1998年から2008年まではほぼ4%から5%前後で一定していた。今回2010年は1.9%と低下している。女性では、1994年から1998年まで22.0%、19.0%、14.4%と漸減し、2000年から2008年まで14%から15%台であり、今回も12.6%とあまり変化していない。

全体としてみるとこの10年ほど児童自立支援施設入所児の大麻乱用は有機溶剤乱用と比較すると大きな変化はなく、男性では4%から5%、女性では14%から15%である。今回やや減った印象があるがはっきりとはしていない。

### 3) 覚せい剤

検挙された覚せい剤乱用少年は1990年代中頃より増加し、その後1998年より減少傾向にある。このような傾向と同様に、児童自立支援施設調査の覚せい剤乱用頻度も、男性では1994年1.2%から2000年5.0%まで増加傾向にあり、2002年度に2.5%へと始めて減少し、2004年1.6%、2006年0.7%、2008年0.3%となった。今回も0.4%であり2006年以降1%以下という状況が続いている。女性では1994年6.6%から1998年16.9%まで急増し、その後は減少傾向を示し2008年6.9%となった。今回2010年では8.3%であり前回と同様な結果と言える。全般に覚せい剤乱用は一時増加したが、ここ数年は減少したままの傾向にあるといえよう。

### 3 対象者の特性の変化

今回の調査より、有機溶剤乱用の減少がはっきりしてきた。原因のひとつには単純に有機溶剤が乱用薬物として好まれなくなったことが考えられる。その他有機溶剤乱用減少に関連すると思われる要因として、有機溶剤乱用への態度、有機溶剤乱用への知識、入所児童の非行性そのものの変化なども考えられる。以下従来のわれわれの調査結果もふまえて、有機溶剤乱用頻度の減少に対する態度などの要因の影響を検討する。

#### 1) 薬物乱用に対する態度

従来調査と同様に、今回対象薬物について、各薬物の乱用についてどう思うか、および法律で薬物乱用を禁止していることをどう思うかを尋ねた。全体として従来の結果とほぼ同様な結果が得られた。すなわち、乱用者は非乱用者よりも薬物乱用に許容的であり、また乱用を法律で禁止する必要はなく個人の好きにすればよいと考える傾向にある。また、乱用者、非乱用者に限らず女性の方が男性より薬物乱用に許容的である。

縦断的にみても「法律で禁じられているから、有機溶剤を乱用すべきではないと思う」と答えた者の割合は、1998年には男性67.6%女性53.1%であり、今回2010年度は男性68.3%女性39.3%であった。この間有機溶剤乱用頻度は大きく減少したが、有機溶剤乱用に対して特に禁止的態度にはなっていない。

また法律で有機溶剤乱用を禁止していることについて「禁止することを当然」「禁止するのは仕方ない」と回答したものの割合は、1998年には男性78.3%女性71.2%であり、2010年度は男性70.0%女性47.1%であった。法律で禁止されていることに対する態度も変化していないといえる。

これらより、近年の入所児童における有機溶剤乱用頻度の減少と有機溶剤乱用に対する態度はあまり関係がないと思われる。確かに乱用別にみる

と乱用者は非乱用者よりも薬物乱用に許容的態度である薬物乱用と乱用への態度は関連があるが、有機溶剤に対する態度は乱用頻度の年代変化を説明するものではないようである。

#### 2) 薬物の有害性知識

具体的有害性知識が乱用前からあったら乱用しなかったかどうかという、有害性知識と乱用抑止の関係も前回同様に検討した。その結果、やはり前回同様な傾向にあった。結果に示したとおり、もし有害性を知っていたら使用しなかったと答えた者は少なく、大多数は有害性知識があっても使用したと答えている。これは、単なる知識としての啓蒙教育で防げるの薬物乱用は全体の一部に過ぎないことを予測させる。ただ、今回も薬物の害について質問紙で簡単に尋ねただけなので、十分な啓蒙教育を実際に実施にその前後で態度の変化を測定しなければ教育による態度変容の効果を判定することは難しい。

このことより近年の有機溶剤乱用の低下は有機溶剤の害知識にそれほど関係していないことが考えられる。有機溶剤による精神病状態について知っている者は1998年男性63.6%女性82.2%、2010年は男性乱用者67.9%男性非乱用者57.9%、女性乱用者78.5%女性非乱用者75.1%であった。またフラッシュバックについては1998年男性40.6%女性50.2%であり、一方2010年は男性乱用者67.9%男性非乱用者48.4%、女性乱用者79.6%女性非乱用者69.0%であった。精神病状態についてはあまり変化はないがフラッシュバックの知識はやや増加している。

これらより有機溶剤の害知識も特に近年の有機溶剤乱用頻度減少を説明するものではないと思われる。

#### 3) 非行歴

入所児童の非行性そのものの変化が薬物乱用頻度と関連していることが考えられる。そこで代表

的な非行行動として「恐喝・ひったくり」「不良交友」「傷害」の頻度を以前の調査結果と比較した。

「傷害」は1998年男性70.0%女性57.1%、今回は男性62.2%女性53.2%であった。やや減少傾向かあまり変わらないように見える。「不良交友」は1998年男性69.4%女性80.5%、今回調査では男性49.9%女性66.8%であった。やはりこれもやや減少傾向にあるようである。「恐喝・ひったくり」は1998年男性59.6%女性54.4%、今回は男性30.6%女性27.7%であった。これも減少傾向にある。

1998年より児童自立支援施設は教護院より名称変更され、施設目的も非行性の除去だけでなく自立への援助が必要な児童への対応となってきた。そのため以前より入所児童の非行度は低下している可能性が示唆される。有機溶剤乱用頻度の減少もこのような入所児童の非行性の低下と一部関連しているのかもしれない。しかし薬物によって乱用頻度が大きく減少しているものとそうでないものがあり乱用と非行性全体の関連ははっきりはしない。一方、家庭裁判所への係属率などはそれほど変化しておらず、一概に非行性が低下しているとも言いきれず、薬物乱用との関連は断定できない。

今後母集団としての入所児童の特性変化に注意しながら薬物乱用調査をしていく必要があると思われる。

#### 4 方法論上の問題点

##### 1) 対象者の特性

本研究は児童自立支援施設入所非行児の薬物乱用の実態調査であるが、前述のとおり入所児童の特性が以前と変化している可能性がある。今回入所児童のいくつかの非行行動は薬物乱用に限らず次第に減少していることが示唆されている。

施設関係者の間では入所児童が以前ほどいわゆる反社会性が目立たなくなっていると言われ

ている。特に1998年に教護院から児童自立支援施設へと名称変更になり、同時に施設目的がかつての教護院時代の非行性除去ではなく児童への支援となり、さらに入所児童が変化してきていると考えられる。入所児童はおもに反社会性の高い非行児童であるが、非社会的であったり精神障害を伴い不適応を起こしていたりする児童が増えてきているといわれている。

以前よりも非行性の軽い児童が多く入所するようになってきているとすると、当然薬物非行もそれに伴い減少している可能性がある。したがって入所児童の特性の変化に注意しながら今後の継続的調査を進めていく必要がある。

##### 2) 対象数の変動

われわれの調査は全国児童自立支援施設を対象としているが施設回収率はこれまで70%から80%である。有効回答数は2006年調査では986人とやや少なくなったが、それ以外はほぼ1000人から1300人ほどである。今回も有効回答数1064人であり例年通りと言える。人数が少ないと地域差による変動なども受けやすく結果の信頼性も低下する。本調査は比較的質問数が少ないとはいえ、児童および施設にとって調査協力はやはり負担であると思われるので、次回以降の調査でも回答数が極端に減少しないよう配慮した研究計画を作成していく予定である。

##### 3) 無回答率の問題

無回答を減らすために無記名式の質問紙調査としているが、質問内容が薬物乱用という反社会行動であるため無回答が多くなることが予想される。今回の調査で各薬物の乱用経験について2%から5%が無回答であった。乱用率が数%程度の薬物では乱用頻度と無回答率が変わらないこととなる。無回答者においては薬物乱用者が多い可能性があるため、特に乱用率の低い薬物では乱用率の信頼性が乏しくなる。男性では女性よりも薬物乱用が

少ないため有機溶剤およびブタン以外の薬物は乱用頻度の信頼性が低い。

## 5 今後の課題

### 1) 調査対象数の問題

今回調査の施設参加率は75.4%であった。前回の参加率は84.2%であり、今回はやや少なくなった。年度による施設の調査参加率の変動が大きいと結果の信頼性が低下するので今後とも施設回答率が一定以上保たれるようにする必要がある。ひとつにはやはり本調査が施設や児童の抵抗を引き起こさないような内容であることに注意しなければならない。現在でも薬物乱用への質問は無用な関心を引き起こしたり過去の非行を思い出させたりして良くないと考えられる場合があるようである。これらの点に配慮しつつ必要な事柄を聴ける質問紙にしていくことが望まれる。また調査時期が適切かどうかの問題もある。同時期に他の調査の依頼、入所児童の生活態度・状況、施設行事等により調査に参加しにくくなることもある。これらの点を考慮して今後の調査計画を立てる必要があると感がえられる。

### 2) 非行少年における薬物乱用の減少に対する対応

現在でも女性入所児童において、有機溶剤乱用は30%ほど認められ、施設入所中の薬物教育は重要である。しかし、男性入所児童において薬物非行は激減した。また以前は薬物乱用と言えば有機溶剤と覚せい剤であったが、今は多様な薬物が使用されている。使用される薬物が多様であると、その有害性の説明も多様になるであろうし、入手経路などもまた多様になる。全般的な薬物教育は変わらないと思われるが、施設としては多くの乱用薬物について教育することが難しくなっているかもしれない。そもそも薬物非行が目立たなくなると薬物教育そのものがおざなりになることも危惧される。薬物乱用児童にとって施設入所中は薬物

教育を受けられる良い機会でありこの間に適切な教育を受けられるかどうかは施設退所後の薬物乱用再発にとって重要と思われる。

非行少年における薬物乱用は有機溶剤乱用中心から多様になってきており、今後そのような変化に合わせた調査や啓蒙教育が必要と思われる。ブタンや医薬品その他薬物を考慮して調査を継続していく必要がある。

## E. 結論

薬物乱用のハイリスク群である非行児の薬物への意識および実態を把握する目的のため、全国の児童自立支援施設に入所中の児童に質問紙調査を実施した。有効調査人数は、1064人(男性739人、女性325人)であった。調査により以下のような結果が得られた。

1) 有機溶剤乱用者数は男性53人(7.2%)女性93人(28.6%)、大麻乱用者数は男性14人(1.9%)女性41人(12.6%)、覚せい剤乱用者数は男性3人(0.4%)女性27人(8.3%)、ブタン乱用者数男性67人(9.1%)女性70人(21.5%)であった。その他、抗不安薬(安定剤)乱用が男性30人(4.1%)女性70人(21.5%)、ブロン(咳止め液)乱用が男性18人(2.4%)女性42人(12.9%)に認められた。従来の結果と同様にすべての薬物にて女性は男性より乱用頻度が高かった。

2) 1994年度からの薬物乱用頻度の変化は以下のとおりである。有機溶剤乱用はこれまでと同様に減少傾向を示した。特に男性においてこの傾向が著しく、1994年41.2%から2006年以降10%前後に減少し今回は7.4%となった。女性でも1994年59.6%から2006年以降30%となっていたが、今回さらに減少し22.9%となった。覚せい剤乱用は男女とも2000年ころまでやや増加傾向にあったが、2002年以降減少傾向を示しており、男性は2006年以降1%以下で女性は2008年以降10%以下となった。大麻乱用頻度について、男性は4%から5%前後であったが今回は1.9%となり、一方

女性では1994年(22.0%)および1996年(19.0%)はやや高かったが1998年から14%から15%台であり今回も大分変化はなかった。

3)有機溶剤乱用に対する態度の年代変化を検討したところ、1998年以降大きな変化は見られなかった。このことより近年の有機溶剤乱用頻度の減少と児童の薬物乱用への態度はあまり関係がないと考えられた。一方、入所非行児の非行歴を検討した結果、非行程度がやや軽度化している傾向が疑われた。

#### 謝辞

本研究は、全国の児童自立支援施設の多くの方々のご協力により実施ができました。ご協力いただいた方々にここで深謝させていただきます。

#### F 健康危険情報

本調査結果自体が健康危険情報に関するものである。

#### G 研究発表

なし

#### H 知的財産権の出願・登録状況(予定を含む)

なし

#### 文献

- 1) 阿部恵一郎：児童福祉施設(教護院)における有機溶剤乱用少年・少女の実態調査。平成6年度厚生科学研究費補助金「麻薬等総合対策研究事業」薬物依存研究の社会的、精神医学的特徴に関する研究 平成6年度研究結果報告書。1995
- 2) 庄司正実：全国の児童自立支援施設における薬物依存の意識・実態に関する研究 平成10年度厚生科学研究「薬物乱用・依存等の疫学的研究及び中毒性精神病患者等に対する適切な医療のあり方についての研究」。1999
- 3) 庄司正実：全国の児童自立支援施設における薬物依存の意識・実態に関する研究 平成12年度厚生科学研究「薬物乱用・依存等の実態把握に関する研究及び社会経済的損失に関する研究」。2001
- 4) 庄司正実：全国の児童自立支援施設における薬物依存の意識・実態に関する研究 平成14年度厚生労働科学研究「薬物乱用・依存等の実態把握に関する研究及び社会経済的損失に関する研究」。2003
- 5) 庄司正実：全国の児童自立支援施設における薬物依存の意識・実態に関する研究 平成16年度厚生労働科学研究「薬物乱用・依存の実態とその社会的影響・対策に関する研究」。2005
- 6) 庄司正実：全国の児童自立支援施設における薬物依存の意識・実態に関する研究 平成18年度厚生労働科学研究「薬物乱用・依存等の実態把握と乱用・依存者に対する対応策に関する研究」。2007
- 7) 庄司正実：全国の児童自立支援施設における薬物依存の意識・実態に関する研究 平成20年度厚生労働科学研究「薬物乱用・依存等の実態把握と「回復」に向けての対応策に関する研究」。2009
- 8) 平成21年版犯罪白書 法務総合研究所。2009
- 9) 平成19年版青少年白書 内閣府。2007

表1 性・学年構成

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
小学 4年以下	11	1.5	2	0.6
小学 5年	10	1.4	4	1.2
小学 6年	39	5.3	13	4.0
中学 1年	82	11.1	36	11.1
中学 2年	208	28.1	75	23.1
中学 3年	295	39.9	151	46.5
高校 1年	25	3.4	13	4.0
高校 2年	12	1.6	1	0.3
高校 3年	9	1.2	3	0.9
専門学校	2	0.3	0	0.0
中卒 無職	37	5.0	20	6.2
就労中	3	0.4	3	0.9
無回答ほか	6	0.8	4	1.2
計	739	100.0	325	100.0

表2 性・年齢構成

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
9歳以下	6	0.8	1	0.3
10歳	8	1.1	4	1.2
11歳	18	2.4	2	0.6
12歳	49	6.6	22	6.8
13歳	123	16.6	45	13.8
14歳	264	35.7	118	36.3
15歳	199	26.9	104	32.0
16歳	39	5.3	14	4.3
17歳	16	2.2	11	3.4
18歳	7	0.9	2	0.6
無回答ほか	10	1.4	2	0.6
計	739	100.0	325	100.0

表3 施設入所期間

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
3ヶ月以下	137	18.5	62	19.1
4～6ヶ月	116	15.7	51	15.7
6ヶ月～1年	186	25.2	85	26.2
～1年6ヶ月	138	18.7	65	20.0
～2年	46	6.2	19	5.8
2年以上	75	10.1	22	6.8
無回答	41	5.5	21	6.5
計	739	100.0	325	100.0

表4 地域別人数

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
東北・北海道	138	18.7	48	14.8
関東	143	19.4	52	16.0
中部	82	11.1	28	8.6
関西	139	18.8	83	25.5
中国・四国	128	17.3	56	17.2
九州	64	8.7	38	11.7
不詳	45	6.1	20	6.2
計	739	100.0	325	100.0

表5 非行歴

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
学校をさぼった	508	68.7	272	83.7
外泊や家出をした	483	65.4	264	81.2
自転車を盗んだ	449	60.8	197	60.6
人の物やお金を盗んだ	475	64.3	216	66.5
人にけがをさせた	460	62.2	173	53.2
家からお金を持ち出した	410	55.5	179	55.1
不良仲間とつき合った	369	49.9	217	66.8
家の中で暴れた	298	40.3	155	47.7
人の物をわざと壊した	287	38.8	108	33.2
バイクや自動車を盗んだ	245	33.2	100	30.8
ひったくり、カツアゲ	226	30.6	90	27.7
無免許運転	248	33.6	124	38.2
物や家に火をつけた	231	31.3	81	24.9
根性焼きや入墨をした	198	26.8	123	37.8
性関係のこと	194	26.3	151	46.5
その他	127	17.2	79	24.3
暴力団とつき合った	77	10.4	67	20.6
暴走族に入った	45	6.1	25	7.7

表6 初発非行年齢

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
小学校入学前	49	6.6	13	4.0
小学 1年	72	9.7	26	8.0
小学 2年	53	7.2	23	7.1
小学 3年	78	10.6	29	8.9
小学 4年	83	11.2	42	12.9
小学 5年	85	11.5	38	11.7
小学 6年	98	13.3	40	12.3
中学 1年	106	14.3	56	17.2
中学 2年	34	4.6	23	7.1
中学 3年	3	0.4	3	0.9
中学卒業後	4	0.5	1	0.3
無回答	74	10.0	31	9.5
計	739	100.0	325	100.0

表7 家庭裁判所への係属歴

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
ある	192	26.0	76	23.4
ない	442	59.8	202	62.2
無回答	105	14.2	47	14.5



表8 周囲の薬物乱用状況

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
有機溶剤	145	19.6	171	52.6
大麻	82	11.1	112	34.5
覚せい剤	59	8.0	111	34.2
ガス	138	18.7	118	36.3
コカイン	28	3.8	49	15.1
リタリン	16	2.2	27	8.3
睡眠薬	7	0.9	15	4.6
安定剤	75	10.1	134	41.2
咳止め液	64	8.7	103	31.7
MDMA	15	2.0	26	8.0
その他	23	3.1	33	10.2

表9 本人の薬物乱用歴

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
有機溶剤	53	7.2	93	28.6
大麻	14	1.9	41	12.6
覚せい剤	3	0.4	27	8.3
ガス	67	9.1	70	21.5
コカイン	8	1.1	21	6.5
リタリン	2	0.3	8	2.5
睡眠薬	5	0.7	8	2.5
安定剤	30	4.1	70	21.5
咳止め液	18	2.4	42	12.9
MDMA	3	0.4	13	4.0
その他	7	0.9	20	6.2

表10 飲酒歴

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
1年で数回	137	18.5	37	11.4
月に2-3回	124	16.8	40	12.3
週に2-3回	110	14.9	82	25.2
ほぼ毎日	72	9.7	96	29.5

表11 飲酒開始

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
小学 1年	8	1.1	8	2.5
小学 2年	9	1.2	8	2.5
小学 3年	21	2.8	15	4.6
小学 4年	21	2.8	19	5.8
小学 5年	50	6.8	40	12.3
小学 6年	70	9.5	27	8.3
中学 1年	148	20.0	75	23.1
中学 2年	58	7.8	38	11.7
中学 3年	6	0.8	4	1.2

表12 タバコ歴

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
1年で数回	78	10.6	22	6.8
月に2-3回	32	4.3	10	3.1
週に2-3回	53	7.2	27	8.3
ほぼ毎日	311	42.1	193	59.4

表13 タバコ開始

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
小学 1年	7	0.9	3	0.9
小学 2年	12	1.6	7	2.2
小学 3年	15	2.0	9	2.8
小学 4年	38	5.1	23	7.1
小学 5年	58	7.8	39	12.0
小学 6年	87	11.8	38	11.7
中学 1年	128	17.3	72	22.2
中学 2年	47	6.4	27	8.3
中学 3年	11	1.5	3	0.9

表14 有機溶剤・大麻・覚せい剤の乱用頻度の年代変化(男性)

	単位:%									
	1994	1996	1998	2000	2002	2004	2006	2008	2010	
有機溶剤	41.2	37.3	30.3	26.4	21.6	14.3	9.8	10.7	7.2	
大麻	5.5	6.7	4.8	5.0	4.9	4.9	2.7	4.0	1.9	
覚せい剤	1.2	1.7	3.9	5.0	2.5	1.6	0.7	0.3	0.4	

表15 有機溶剤・大麻・覚せい剤の乱用頻度の年代変化(女性)

	単位:%									
	1994	1996	1998	2000	2002	2004	2006	2008	2010	
有機溶剤	59.6	50.6	48.5	52.3	46.5	44.2	31.1	30.5	28.6	
大麻	22.0	19.0	14.4	14.7	15.9	15.9	14.0	14.0	12.6	
覚せい剤	6.6	10.8	16.9	15.2	13.6	12.4	10.9	6.9	8.3	

表16 地域別薬物乱用頻度(男性)

	有機溶剤	大麻	覚醒剤	ブタン
東北・北海道(n=138)	3.7%	0.7%	1.5%	8.8%
関東(n=143)	5.1%	3.6%	0.7%	5.8%
中部(n=82)	8.8%	1.2%	0.0%	9.9%
関西(n=139)	8.1%	2.3%	0.0%	11.9%
中国・四国(n=128)	8.7%	0.8%	0.0%	9.4%
九州(n=64)	7.9%	3.2%	0.0%	7.9%

表17 地域別薬物乱用頻度(女性)

	有機溶剤	大麻	覚醒剤	ブタン
東北・北海道(n=48)	32.6%	15.2%	11.1%	37.0%
関東(n=52)	28.6%	4.1%	4.1%	18.4%
中部(n=28)	23.1%	0.0%	3.8%	11.1%
関西(n=83)	32.9%	15.4%	10.4%	22.1%
中国・四国(n=58)	22.6%	7.4%	5.6%	16.4%
九州(n=38)	38.2%	27.8%	12.1%	29.4%

表18 自分の周囲の有機溶剤乱用による精神症状発現者

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
いた	45	6.1	75	23.1
いない	666	90.1	244	75.1
無回答	28	3.8	6	1.8

表19 有機の誘い

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
ある	86	11.6	112	34.5
ない	643	87.0	208	64.0
無回答	10	1.4	5	1.5

表20 有機溶剤入手困難さ

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
簡単に手に入る	121	16.4	112	34.5
なんとか手に入る	68	9.2	47	14.5
ほとんど不可能だ	47	6.4	15	4.6
絶対不可能だ	233	31.5	54	16.6
無回答	270	36.5	97	29.8

表21 有機溶剤乱用開始年齢(乱用者のみ)

	男性(n=53)		女性(n=93)	
	人数	%	人数	%
10歳以下	5	9.4	5	5.4
11歳	2	3.8	6	6.5
12歳	7	13.2	19	20.4
13歳	17	32.1	21	22.6
14歳	8	15.1	14	15.1
15歳以上	1	1.9	3	3.2
年齢はおぼえていない	2	3.8	10	10.8
無回答	11	20.8	15	16.1

表22 最もしていた時の有機溶剤乱用頻度(乱用者のみ)

	男性(n=53)		女性(n=93)	
	人数	%	人数	%
今まで1, 2回数回以上	28	52.8	43	46.2
数回以上	9	17.0	30	32.3
ほとんど毎日	3	5.7	5	5.4
無回答	13	24.5	15	16.1

表23 有機への法律知識(乱用者のみ)

	男性(n=53)		女性(n=93)	
	人数	%	人数	%
知っていた	47	88.7	78	83.9
知らなかった	5	9.4	11	11.8
無回答	1	1.9	4	4.3

表24 有機溶剤乱用への態度(男性)

	有機溶剤乱用			
	乱用者(n=53)		非乱用者(n=668)	
	人数	%	人数	%
法律で禁じられているから、すべきではないと思う	12	22.6	493	73.8
法律で禁じられてはいるが、少々ならかまわないと思う	16	30.2	48	7.2
法律で禁じられてはいるが、それを守る必要は全然ないと思う	22	41.5	34	5.1
無回答	3	5.7	93	13.9

表25 有機溶剤乱用への態度(女性)

	有機溶剤乱用			
	乱用者(n=93)		非乱用者(n=213)	
	人数	%	人数	%
法律で禁じられているから、すべきではないと思う	7	5.5	121	43.2
法律で禁じられてはいるが、少々ならかまわないと思う	48	37.5	46	16.4
法律で禁じられてはいるが、それを守る必要は全然ないと思う	34	26.6	30	10.7
無回答	4	3.1	16	5.7

表26 有機溶剤乱用禁止への態度(男性)

	有機溶剤乱用			
	乱用者(n=53)		非乱用者(n=668)	
	人数	%	人数	%
当然だと思う	15	28.3	416	62.3
しかたないことだと思う	10	18.9	77	11.5
シンナーくらい禁止しなくてもいいのではないかと 思う	3	5.7	12	1.8
法律で決める必要はなく、個人の好きにさせればよいと思う	20	37.7	54	8.1
無回答	5	9.4	109	16.3

表27 有機溶剤乱用禁止への態度(女性)

	有機溶剤乱用			
	乱用者(n=93)		非乱用者(n=213)	
	人数	%	人数	%
当然だと思う	12	12.9	92	43.2
しかたないことだと思う	16	17.2	33	15.5
シンナーくらい禁止しなくてもいいのではないかと 思う	19	20.4	10	4.7
法律で決める必要はなく、個人の好きにさせればよいと思う	40	43.0	47	22.1
無回答	6	6.5	31	14.6

表28 有機溶剤の知識(男性)

	有機溶剤乱用			
	乱用者(n=53)		非乱用者(n=668)	
	人数	%	人数	%
急性中毒死	17	32.1	209	31.3
多発神経炎	19	35.8	199	29.8
精神病状態	36	67.9	387	57.9
無動機症候群	24	45.3	192	28.7
フラッシュバック	36	67.9	323	48.4
いずれも知らなかった	11	20.8	152	22.8

表29 有機溶剤の知識(女性)

	有機溶剤乱用			
	乱用者(n=93)		非乱用者(n=213)	
	人数	%	人数	%
急性中毒死	43	46.2	83	39.0
多発神経炎	44	47.3	76	35.7
精神病状態	73	78.5	160	75.1
無動機症候群	53	57.0	83	39.0
フラッシュバック	74	79.6	147	69.0
いずれも知らなかった	11	11.8	26	12.2

表30 有機溶剤で体験した症状(有機溶剤乱用者)

	男性乱用者(n=53)		女性乱用者(n=93)	
	人数	%	人数	%
精神病状態	10	18.9	23	24.7
フラッシュバック	9	17.0	25	26.9
多発神経炎	1	1.9	4	4.3
無動機症候群	11	20.8	21	22.6

表31 有機溶剤の薬害知識と乱用抑止(有機溶剤乱用者)

	男性乱用者(n=53)		女性乱用者(n=93)	
	人数	%	人数	%
しなかったと思う	17	32.1	20	21.5
やはりしていたと思う	20	37.7	56	60.2
無回答	16	30.2	17	18.3

表32 施設退所後、乱用しないと思うか(有機溶剤乱用者)

	男性乱用者(n=53)		女性乱用者(n=93)	
	人数	%	人数	%
絶対やらないと思う	39	73.6	48	51.6
多分やらないと思う	10	18.9	28	30.1
多分やると思う	3	5.7	17	18.3
絶対やると思う	1	1.9	0	0.0
無回答	0	0.0	0	0.0

表33 退所後、乱用すると思う理由(退所後「多分やる」「絶対やる」と答えた者、重複回答あり)

	男性乱用者(N=4)		女性乱用者(N=17)	
	人数	%	人数	%
誘われたらやると思うから	3	75.0	8	47.1
今もやりたいから	0	0.0	7	41.2
いやなことがあったら	0	0.0	14	82.4
なんとなくそう思うから	4	100.0	9	52.9

表34 自分の周囲のブタン乱用による精神症状発現者

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
いた	56	7.6	56	17.2
いない	631	85.4	254	78.2
無回答	52	7.0	15	4.6

表35 ブタンの誘い

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
ある	81	11.0	80	24.6
ない	560	75.8	225	69.2
無回答	98	13.3	20	6.2

表36 ブタン入手困難さ

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
簡単に手に入る	244	33.0	157	48.3
なんとか手に入る	36	4.9	24	7.4
ほとんど不可能だ	27	3.7	11	3.4
絶対不可能だ	184	24.9	46	14.2
無回答	248	33.6	87	26.8

表37 ガスペンを知っていたか

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
知らなかった	376	50.9	100	30.8
関心がなかった	216	29.2	140	43.1
見てみたかった	17	2.3	19	5.8
試してみたかった	46	6.2	45	13.8
無回答	84	11.4	21	6.5

表38 ブタン乱用開始年齢(乱用者のみ)

	男性(n=67)		女性(n=70)	
	人数	%	人数	%
10歳以下	1	1.5	0	0.0
11歳	4	6.0	3	4.3
12歳	14	20.9	17	24.3
13歳	21	31.3	16	22.9
14歳	9	13.4	17	24.3
15歳以上	3	4.5	0	0.0
年齢は覚えていない	2	3.0	7	10.0
無回答	13	19.4	10	14.3

表39 最もしていた時のブタン乱用頻度(乱用者のみ)

	男性(n=67)		女性(n=70)	
	人数	%	人数	%
今まで1, 2回	23	34.3	23	32.9
数回以上	19	28.4	25	35.7
ほとんど毎日	10	14.9	11	15.7
無回答	15	22.4	11	15.7

表40 ブタン乱用への態度(男性)

	ブタン乱用			
	経験有(n=67)		経験無(n=651)	
	人数	%	人数	%
すべきではないと思う	15	22.4	286	43.9
少々ならかまわない	20	29.9	38	5.8
かまわない	21	31.3	23	3.5
知らなかった	9	13.4	246	37.8
無回答	2	3.0	58	8.9

表41 ブタン乱用への態度(女性)

	ブタン乱用			
	経験有(n=70)		経験無(n=236)	
	人数	%	人数	%
すべきではないと思う	6	8.6	102	43.2
少々ならかまわない	24	34.3	28	11.9
かまわない	32	45.7	25	10.6
知らなかった	6	8.6	63	26.7
無回答	2	2.9	18	7.6

表42 ブタンの知識(男性)

	ブタン乱用			
	経験有(n=67)		経験無(n=651)	
	人数	%	人数	%
精神病状態	20	29.9	126	19.4
急性中毒死	24	35.8	127	19.5
いずれも知らなかった	32	47.8	417	64.1

表43 ブタンの知識(女性)

	ブタン乱用			
	経験有(n=70)		経験無(n=236)	
	人数	%	人数	%
精神病状態	28	40.0	75	31.8
急性中毒死	26	37.1	56	23.7
いずれも知らなかった	31	44.3	128	54.2

表44 ブタンで体験した症状(乱用者のみ)

	男性乱用者(n=67)		女性乱用者(n=70)	
	人数	%	人数	%
精神病状態	15	22.4	23	32.9
フラッシュバック	9	13.4	22	31.4

表45 ブタンの知識と乱用抑止(乱用者のみ)

	男性乱用者(n=67)		女性乱用者(n=70)	
	人数	%	人数	%
しなかったと思う	19	28.4	16	22.9
やはりしていたと思う	32	47.8	47	67.1
無回答	16	23.9	7	10.0

表46 施設退所後, 乱用しないと思うか(ブタン乱用者のみ)

	男性乱用者(n=67)		女性乱用者(n=70)	
	人数	%	人数	%
絶対やらないと思う	51	76.1	33	47.1
多分やらないと思う	10	14.9	24	34.3
多分やると思う	2	3.0	12	17.1
絶対やると思う	0	0.0	1	1.4
無回答	4	6.0	0	0.0

表47 退所後, 乱用すると思う理由(退所後「多分やる」「絶対やる」と)

	男性乱用者(n=2)		女性乱用者(n=13)	
	人数	%	人数	%
誘われたらやると思うから	1	50.0	4	30.8
今もやりたいと思っているから	0	0.0	7	53.8
いやなことがあったらやると思うから	0	0.0	7	53.8
なんとなくそう思うから	8	400.0	6	46.2